

平成28年6月16日

原発事故による被害について

菅波香織

原発事故後、5年が経過する今、住民の対話の場では、「今の方が辛い」という声が多くあがる。原発事故による避難と、コミュニティ崩壊、放射能汚染問題は、複雑さを増し、課題は細分化して見えにくくなり、更に可視化しにくくなっていつている。

私の住む福島県いわき市は、人口約30万人。避難指示は出されなかったものの、事故直後は、約半分の人が避難し、町を離れたと言われているほどであった。その後、避難者の方が約2万4000人居住し、約1万人とも言われる原発作業員の方や除染作業員の方が行き交う町となった。一方で、いわき市からのいわゆる自主避難者は、公式な数値としても未だ5000人ほどと言われている。いわき市から離れている理由を問うアンケートを見ると、低線量被ばくに対する不安、未だ収束していない原発の近隣に居住することへの不安をあげる声が非常に多い。

そんな中、私が、5人の子どもを育て、弁護士としてあるいは任意団体で子ども関係の仕事をしている中で見聞きした「原発事故後の子どもたちの状況」について話したいと思う。

1 子どもの思い、親への配慮

故郷への想いが強い大人たちの苦悩の一方で、子どもたちについて見ると、表向きに出てくる言葉は、むしろ新しい生活になじんでいるようにも見える。しかし、「ふるさとなどに興味はない」という言葉の裏に、親に心配をかけたくないという配慮や、傷ついた自分に触れたくないという想いがないと断言することはできない。余震が来る度に極度に怖がる私の娘は、「住んでみたい街を描く」という街づくりワークショップに参加したときに、星型のなかに「地震のない町」と書いた。その娘が10歳の「2分の1成人式の日」に話した将来の夢は、「放射能を消す機械を作っ

て、みんなを笑顔にしたい」だった。

震災時小学生だったある避難中の子どもが、震災後4年半頃、自宅に初めて足を踏み入れたそう。置かれていたピアノを演奏したいと言ったその子は、小学校の校歌を演奏したという。子どもの故郷への想いを感じた親は、その姿に涙を隠せなかったそう。

## 2 復興の「人材？」

今、福島周辺の子どもたち、特に、避難区域出身の子どもたちは、「復興の担い手」と大人から表現されてしまっている。その期待を十分に理解している子どもたちは、大人の期待に応えようと頑張っている。しかしその姿が、私には痛々しくてならない。ある広野町出身の高校生は、「住民と交流して意見を聞いて、住民の意見を復興に取り入れたい」と言った。ある双葉高校の学生が、「この5年間、『復興のため』『福島のために』などと、県内の子どもに未来を担ってもらおうということで、負担がかかっているとおもう」「子どもにあまり負担をかけず、大人たちに頑張ってもらいたい」と述べた話も、身につまされる思いである。子どもが、子どもらしくいることができない原発事故後の状況で、私たち大人は何をすべきなのか。

## 3 震災が子どもの成長に与えた影響

保育士の方々からは、子どもの成長に影響が出てきたとの声が多数聴かれる。震災時、2歳から5歳のいわゆるゴールデンエイジであった子どもたちが、そこから数年、屋外活動や身体的発達に必要な運動を妨げられたことによって、着くべき筋肉が付かず、体幹が弱い傾向にあるという話を聴く。また、震災時、乳幼児だった子どもたちに発達障害的な傾向を感じる子どもが増えたとも聞く。更に、震災年に生まれた子どもたちに、落ち着かない等の傾向が見られ、震災前の子どもたちの状況と明らかに異なるという話もある。これらが原発事故後の生活状況と因果関係があるのかについては、これから調査等も必要であろう。しかしながら、福島県内では未だに、外遊びを普通にさせているという保護者が半数程度にとどまり、他県(震災で甚大な被害を受けた岩手県等を含む)において約9割以上の保護者が、外遊び

を普通にさせているとのアンケート結果を踏まえれば、福島県において、震災前と同じ子どもの生活環境は全く取り戻されていないといわざるを得ない。

#### 4 強制避難を余儀なくされた地域の子どもたち

また、強制避難を余儀なくされた双葉郡等の地域の子どもたちは、ばらばらに離散し、別々の学校に通学することとなってしまった。檜葉町の中学生に対して行われた放射線リテラシーワークショップでは、帰町するかどうかや、どの学校に行くかという問いに対して、「友達と一緒にがいい」という感想を述べた子どもが非常に多かった。また、双葉郡の町村の学校に通い続ける子どもは、時間の経過と共に急激に減っている。教育の質の面で見たときに、従来であれば、ある程度の規模の集団で経験できたことが、今はできなくなってしまったのである。

また、徐々に帰還が進む中、避難先でのサテライト学校が次々に閉じられていく。居住地の別の学校に転校するか、避難元の学校に通学するかという大きな決断を、子どもたちは迫られている。友達と離れたくないという気持ちがありながらも、各家庭の状況は異なっており、子どもたちは、再度ばらばらになる体験を余儀なくされているのである。避難指示解除に伴い、避難元自治体における学校が再開されても、生活の拠点を戻す家庭ばかりではない。昨年9月に避難指示が全町で解除された檜葉町では、平成29年4月の学校再開が予定されているが、いわき市に居を移している多数の町民のうち、実際に通える子どもは限られている上、スクールバスの要望があるものの、原発作業関係の通勤車両の増加による慢性的な交通渋滞を考えると、片道1時間もかかる通学は現実的ではないなど、課題は山積している。

#### 5 避難生活の長期化、不安定な状況

避難を余儀なくされた家庭では、家庭環境に大きな変化が及んだ。核家族化や離散である。避難生活が長期化し、不安定な家庭環境が継続していることが、子どもたちに与える影響も少なくはないだろう。

また、震災直後の無理解から来る「いじめ」や「嫌がらせ」の影響で、震災後5年を経過してもなお、

双葉郡から避難してきたと言えない方も多し。自分のアイデンティティを、友人に自由に話すことさえ憚られる状況で、子どもたちは友達関係を築き上げているのである。

## 6 放射能への不安（大人たちの混乱と葛藤）

放射能への不安に対して、行政が行ってきた「パターナリズム」を前提とした不安解消のための施策は、結果的により大きな混乱を招いたと思う。文部科学省が平成23年8月19日に出した「放射能を正しく理解するために」という通知の中に、「避難指示の出していない区域に暮らしていれば、健康被害もありません」と明記されていた。不安を感じていること自体が「不勉強」とされ、口に出すことすら憚られ、多数の親が大きなストレスを抱え、悩むようにもなった。福島産の食材を子どもに口にさせたくないと言え、ば、「風評をあおるな」「農家の敵」だと責められ、「復興の邪魔」「悪」であるかのように批判された。そのような大人たちの状況の一方で、子どもたちは多様性を受け入れていったように感じる。震災当初こそ、福島県産の食材を使用した給食を食わずに弁当を持参する子どもがいじめられたケースもあった。しかし、現状の子どもたちは、お弁当を持参する子、ご飯だけ持参する子、牛乳（福島県産）を飲まない子がいても、意に介さないのである。あたかも、自分のランドセルは赤だけど、友達はピンクで、違っているのは当然であるといった風に。

## 7 家族の決定に関われない、関わりたい（子どもの意見表明権）

大人たちは、子どもを守ろうと、「放射能の不安を感じて不安になってしまわないように、普通に生活させよう」、又は逆に「ほんのちょっとの被ばくもさせないように配慮しよう」など、思い悩んできた。その大人たちの決定において、子どもの考えや意見が聞かれたことはほとんどなかったように思う。子どもにはわからないだろう、とか、大人が決めてあげなくてはと勝手に考えてきた。しかし、放射能リテラシーワークショップを行った子どもたちからは、「帰還とか移住とか、親が悩んでいるのに、何も助けてあげられないのがつらかった」「どの学校に通うかについて、自分の考えも聞いてほしい（友達と一緒にがいい）。でも、親を困らせたくなくて、言い出せ

ない」「祖父が一生懸命作ってくれた野菜を、母親が食べちゃだめだと言った。自分に、何ができるだろう」「親たちがいろいろ相談しているのが聞こえてくる。自分も、放射能について知って、一緒に考えたい」といった感想がでてきた。

子どものためと言いながら、その子どもを無視して、子どもに向き合わないで、大人だけで決めること。そのやり方はすでに限界に来ていると感じる。

## 8 廃炉までの長い道のり

現時点においても、短くても40年はかかるともいわれる廃炉までの道のり。その間、私は、大きな地震が来る度に、原発の状況と原発周辺の放射線量をチェックする生活を続けることになるだろう。

いわきで住み続ける私には、子どもに関してこんな悩みもある。私がここいわき市に居住を続け、故郷のためにという活動を続けることで、私の子どもたちが、私のように、いわき市への郷土愛を持ってしまうのではないかということだ。そうなることは、本来とても素敵なことだ。しかし、結果的に、子どもたちをこの土地に縛り付けることになってしまうのではないか。わざわざこの地で葛藤や不安を抱えて生活するのではなく、子どもたちにはもっと自由なところでのびのびと活躍して欲しい。私の中には、そんな葛藤もある。

中間貯蔵施設への放射性廃棄物搬入が始まったが、今後、周辺地域には、一日数百台のダンプが通る見込みとも言われる。高濃度の放射性廃棄物を乗せたトラックが事故を起こした時、放射線の管理ができるのか、被ばくを避けられるのか、その後の除染はどうなるのか、対応策はまだ見えない。

## 9 長く続く苦悩

復興を担わされる、背負わされる子どもたち。彼らが押しつぶされないかという不安を感じずにはいられない。子どもたちは、今の困難の中、何かできることはないかと目を輝かせ、真剣に取り組んでいる。しかし、その行動を、自ら選んでいると言えるのかについては疑問もある。私もそうだが、震災の辛い体験を乗り越えようと活動している大人は多いように思う。子どもたちにとっては、震災で受けた心

の傷や衝撃は、大人以上に鮮烈かもしれない。

子どもたちの成長に様々な不安も感じる一方で、震災後、子どもたちは大人以上に、この社会において考え方はそれぞれなのだと、多様性を認めているように感じる。一方で、大人たちは、相変わらず、考え方の違う相手を責め合ったりしている。多様な価値観を持つ者同士が共生できるのか、難しい課題をつきつけた原発事故後、子どもたちの変化には光も感じる。

しかし、多くの人が未だに苦しみ続け、出口さえも見出せていない状況に、心を痛めない日はない。その一方で、原発事故などなかったかのような生活が続く首都圏の様子を受け入れることができずに、怒りばかりを感じる自分にどう向き合えばいいのか、葛藤の毎日である。

原発事故後の状況を何かしら改善しようと動いている人々の多くが、言葉には出さないし表現しないけれども、原発を動かすべきではないと考えているように感じる。二度とこのような悲惨な状況が起きて欲しくないとの強い願いである。本当の思いを言葉に出せない今の社会のあり方に大きな疑問も感じつつ、私はできることをひとつひとつしていくことしかできない。